

家は行政指導の産物である
橋爪大三郎

おとけ 7月・11月 通巻233 p.19 政策研究社 1999.3.25発行

本紹介

「選択・責任・連帯の教育改革」岩波ブックレット No.471
堤清二・橋爪大三郎

社会経済生産性本部の「教育改革に関する中間報告書」の内容のほとんどは、堤清二・橋爪大三郎両氏の対談を集録したもの。報告書起草の精神的背景を知るために最適のブックレットとして、「選択・責任・連帯の教育改革」の原文を手に入れた方におすすみたい。
対談の中で橋爪氏は、「現在の学校は監獄にそっくりです」と指摘、校長も教員も生徒も、いつも自分から見えない誰かに見られているのではとおびえている。それは入学試験だったり、文部省の通達や指導要領だったり。改革案は「自分がもう一度学校に行くのであれば、こんな学校だったら行きたい」と思えるものをつくつたと語る。
両氏の提言する改革の基本姿勢と目的は「学校の機能回復、教育機能の回復」であるが、それが実現したらどんなにすばらしいだろうと思わずにはいられない一冊である。

岸田 家族というのは、人間が本能的に作るものではなくて、人為的な一つの文化形態だと思っんです。だから、家族の問題を考える場合には、人間がなぜ家族というものを必要としたかという観点から考えなければいけない。人間の赤ん坊というのはきわめて無能無力の状態です。生まれてくるわけで、ほかの哺乳類と違って、親が自然な状態で種族保存本能なり母性本能なりに従って育てればすむというものではなくて、不自然に非常に長い期間、誰かの世話にならなければ育たないということがまずある。そういう不自然な状態に対応する自然な本能なんてないわけで、そこでいろいろ無理をしなければいけないわけです。その無理の一つの形態として、家族というものを人間が作ったのだと思いますね。
家族というのはなぜ必要かという点、二つの面があると思うんです。一つは、そのように無能で無力な人間の赤ん坊を育てるため。まあ、赤ん坊だけじゃなくて、大人になっても人間というのは動物として弱い存在ですけどね。お互いに守り合い、保護し合わないと生きてゆけない。それから、女も妊娠すると長い期間働けないから、男の協力が必要です。食べ物を取ってくるとか、稼いでくるとか。そういう経済的とか身体的といった面の必要と、もう一つは精神的な面でも、家族というのは必要だと思っんです。

これも人間がきわめて無能無力の状態です。生まれてくるということと関連しているんですけども、そういう状態で生まれてきて、誰かの世話になるというか、誰かに依存して長期間を過ごすわけですが、その依存しているというのは、単に食べ物をもらうということだけじゃなくて、心理的な面も非常に大きい。誰かに愛されている、自分が価値ある存在と見られているという状態が人間の赤ん坊が心理的な安心感、安定感をもつためには不可欠だということです。動物や鳥の親だって、赤ん坊の世話をするけれども、それは基本的に人間の場合とは違う。誰かに愛されているという状態は、赤ん坊の状態を脱すれば必要がなくなるかという点、そういうわけにいかない。そういう最初の条件が尾を引いて、人間というのは死ぬまで一生誰かに愛されているということが必要をわけです。
ただその必要というのは簡単に満たされるわけではない。愛するほうだって本能的に自然に愛するわけではないので、いろいろ無理や努力も必要になる。ずっと愛されているなんていう幸運な状態はあり得ない。むしろ誰にも愛されていない、不安定な状態にあることが多い。
そこで人間は愛を求め、単に経済的、身体的に世話してくれたり保護してくれるだけではなく精神的にも愛してくれる人が必要だから、恋愛が発生する。恋愛に永続性を求めて、結婚する。そして子供が生まれると、子供を愛し、そして子供に慕われることを求める。親孝行されるということも、単に便利で都合だから子供の援助が必要だというだけじゃなくて、心理的な支えということも絡んでいると思います。つまり家族というものは、愛される必要がある人間にとって、必要不可欠ではないかということです。家族というのは無理した作りのもの、人為的なものだから、理想的家族というか、理念としての家族にはいろいろな形態というのがあると思います。けれども、その理想形態というのは容易に実現するわけはな

1999-20

い。現実の家族の場合、家族の崩壊なんていうことが非常に問題になっていますけれども、もともと崩壊していない家族はなかったというか、そういう理想・理念に比べれば、いつの家族もどこかズレていて崩壊していたのではないかと思えます。

ただ現代の日本は、夫婦別姓とかが問題になり、夫婦別姓は家族の崩壊をもたらすという議論があるし、このあいだも新聞を見たら、一生結婚するつもりはないという人が、男も女も増えているらしくて、適齢期になれば男も女も結婚して子供をつくって、という形態が崩れてきているらしい。それがとくに日本に見られる現象がどうかは知りませんが、しかし、自分を愛してくれる人を必要としている、という人間の条件は変わらないわけで、いわば血縁家族が崩れてくると、擬似家族みたいな、オウム真理教とか、以前にはイエスの方舟みたいなものもありましたけれども、ああいう家族と対立する形の宗教的な集団が発生するのではないか。また、「サザエさん」なんていうのが、いつまでも読まれつづけるというのは、これはわれわれ日本人の憧れの家族の形を表しているのではないかと思えます。

橋爪 たいへん的確にご紹介いただきました。これまで家族について述べられた言説は、おおむね今のお話で集約されているような気がします。私なりにまとめますと、家族という集団をつらぬく、二つのポイントがあるだろうという指摘です。一つは養育、そして教育（子供の社会化）の問題。親子関係ですね。もう一つは、男女の心理的な安定の問題。愛の問題、結婚の問題。親子と結婚、この二つの要素が絡み合っていて、その人間に宿命づけられたものとしての、安定を実現するための人為的な知恵、これが家族であると。そのとおりなわけです。

そしてこの人為的という点が、たぶんポイントになるかと思うんです。もっとも、家族が今まで人類と呼ばれる社会のなかでは、必ず作られてきた集団であって、大変普遍的なものであるということ。人為的であるにしては、あまりに人間の存在と切り離しがたく結びついている。けれどもそれは、家族が人為的な集団でないという意味ではなくて、人間がそもそも人為的な存在だから、というふうに解釈するしかないだろう。

今ご指摘になられなかった点を少しあげますと、家族はたしかにその二つの普遍性によってつらぬかれていたけれども、この二つ（養育と結婚）、この安定した関係を供給する家族の具体的なあり方を考えてみますと、たぶん相当多くのパラエティがあり得る。個々の家族の具体像に踏み入ってみますと、そこには非常に幅広い選択肢があって、実際それはさまざまな社会を通じて、さまざまな家族のパターンとして実現されてきたし、実現されているのではないのかなと。

普通は家族というよりもっと大きく、親族という枠組みのなかで捉えるかもしれませんが。家族に限って言っても、一夫多妻制もあれば一妻多夫制もある。母系の社会もある、父系の社会もある。父親の役割に比べて、母方の叔父の役割を重視する社会もある。それから、ある時期、同性愛を非常に重視する社会もある。というわけで、私たちに、いわゆる核家族が安定した家族のかたちとしてイメージされますけれども、実際にはもっと広い可能性がある。そして多様ではあるけれども、その社会に限って言えば、家族の作り方が文化的にきちんと固定されていて、それは本当に動かしがたい伝統で、ある社会に生まれれば、疑うこともなく、人為的であるなんて考えることもなく、その社会の伝統に従った家族を営んできたわけです。そういうふうにしてきた人類の長い歴史というのがある。

近代になって交通が発達すると、さまざまな家族形態がおたがいに会って、「あ、こんな家族もある、

あんな家族もある」と、自分たちがやってきたのは何だろうということで、初めて家族というものが意識され、それが言葉に置き換えられたとき、家族は人為的であるという認識に立ちいたったと思います。現在、われわれは当然、家族は人為的であるということを知っている。一面、生活者としては、社会の家族のあり方というものを宿命のごとくに受け入れて、これがあたかも自然法則であるかのようになり、自分の生き方としなければならなかった。これがまず一つ付け加えるべき点だと思うんですね。一言で言えば、文化の多様性、家族の多様性というのがあったはずだという点ですね。

岸田 そのとおりだと思います。われわれは近代になって文化が多様であること、家族は相対的で人為的なもので、いろいろな形態があることを知ったわけで、それまではどの種族も自分たちの特殊な家族のあり方を家族というものはそういうものだと思込んで家族を営んでいて、家族というものを、なぜ人類が必要としているかなんていうことはまったく考えずにやってきたと思います。しかし、現代では、民族が違えば家族の形態も違うというだけでなく、日本なら日本のなかでも、日本文化の家族はこういう形態だというふうには言えないほどいろいろな形態がありますから、ここで家族というものはどういう必要性にもとづいているのか、家族というものはどうあつたらいいのかということ、あらためて問題にする価値はあると思います。

日本における家族の成り立ち

橋爪 さきほど家族というのは理想なんだから、揺らがないときなんかあったとおっしゃったんですけれども、その揺らぎには何種類もあるのではないのでしょうか。たとえば大昔、ある社会において、家族は

こういうパターンであるとみんなが信じていたとしても、そこでも離婚もあるだろうし、死別もあるだろうし、理想的な家族のあり方からはずれてしまったものも……。

岸田 不倫も大昔からあつたと思えますしね。不倫がどれくらい悪いことであるかはそれぞれ違っていたでしょうが。

橋爪 そうなんです。家族はルールでできている、約束でできているとすれば、モデルが一つしかなくてそれしか家族を知らなくても、その社会のなかでそこからはずれてしまつたというものはあるんですね。こういうことは家族には起こり得ることで、これが一つの種類の揺らぎである。

でも、これは本当の揺らぎではないかと思うんです。というのは、誰でもモデルどおりのほうがいいと思つていて、なんとかそれをこういう方向でフォローアップしよう、孤児のような子供がいたら、誰かの養子にしようとか考えるわけですけども、その発想は同じなんです。

ところが、もう一つの種類の揺らぎが起こつてくるのではないか。これはたぶん古代に文明が開けていた頃だと思えますけれども、文明が開けることによって、文化としての家族が、制度としての家族というものに移行していく時期があつたのではないか。文明が開けていくということは、異民族同士が出会うということ、異民族同士が出会うというところで、異民族同士が出会うというところは、異民族同士で結婚するということがある。ここに危機が起こるわけなんですけれども、かりに結婚して女性が移動するとすれば、お嫁に行った家で何かをするというところ、ことごとくいろいろな矛盾が起こってくるわけですね。食べ物、着物、名前、言葉から始まって、家族のなかで、日常生活に関するあらゆる矛盾が起こってくる。

つまり文明が興つた時期が、混血が進んだり、文化的な変容が進んだりして、家族像がたぶん大変揺ら

いだと考えることができる。そこで、「どういふ家族を作ればいいか」という問いに対して大変自覚的になり、「家族はこういふものである」というイデオロギーを作って、そういう家族を制度的に生み出す努力があった。それが宗教の大きな役割であって、ユダヤ教とか、キリスト教にもそのイメージが少し残っています。イスラム教にももちろんあります。家族というものはこういうものであり、結婚というものはこういうものである。親子関係とはこういうものである、ということが、あんなに微に入り細をうがって、書物のなかに書き込まれている。

インドの宗教は出家主義なので、家族のことはあまり述べていませんが、中国の宗教、儒教はやっぱり家族のことを非常に詳しく述べていて、朝は何時に起きて、顔を洗ってから、お父さん、お母さん、おはようございますと挨拶して、こういうふうには御飯を出さないとか、足を洗いなさいとか、かりにお父さん、お母さんが亡くなったら、こういう服を着て、何年間、お墓の前の掘っ建て小屋で暮らしなさいとか、そういう行動マニュアルが全部書いてある。中国ではたたくさんの民族が、漢民族というかたちで融合していくプロセスで、「漢民族の家族はこうである」ということを、非常に強調しなければならぬような状況があったのではないか。

ユダヤ民族の場合も、偶像崇拜に対する憎しみというものがありません。偶像崇拜に代表されているのは、ほかの民族、ほかの風習に対する警戒心であって、そして純粋なかたちで凝り固まっていって、そして一つの道具として、家族のあり方というものを法律のかたちで決めてしまった。たぶん古代に民族問題というものが起こってきた状況では、そこで家族というものを強烈に意識するという必要が起こったのではないかと思えます。

岸田 王を父になぞらえることが示しているように、社会は家族の延長といったところがあり、家族の形態というものが社会形態の根本ですから、家族がどうあるべきかという規定は、社会全体がどういふ社会であるべきかということとつながっています。そこは決定的です。家族はどうかというのを決めなければ、この社会はどうかという秩序で維持されていくべきかというのにも決まらないうけです。古代の漢民族とか、イスラム教徒が、家族の非常に細かい点にまでこだわったというのは民族の存続のあり方にかかりがあるからで、それはよくわかるんです。

日本の場合はどうだったのでしょうか。古来、家族というのはそんなにはっきりした規定はなくて、何となく女系家族みたいなところもあったのじゃないかと思ふ。そこに中国から儒教が入ってきて、そこで日本人は初めて、中国の家族形態の根底にある一つの組織立った家族思想に出会ったのではないかと。ところが、中国から輸入した家族思想と、それまで日本人が、家族とはいかにあるべきかということとをあまり考えないで、勝手に営んでいた家族というものが、食い違っていたと思われませんか。しかし日本が国として成立するのは、中国という国の模倣から始まるわけですから、家族という形態も模倣せざるを得ない。中国の家族を見て、これこそは家族だと決めちゃったというか、そのように考えて、日本のいわば理念としての家族がそこで始まった。その理念としての家族というのは、その理念が外来のものであったという関係で、一般の日本人がそれまでやってきたこととズレがあったのじゃないかと思ふんです。

儒教の家族、つまり中国の家族というのは、祖先崇拜というか、家父長制というか、父親が一番偉くて、父親が権力を握っている家族でしょう。日本のほうはなんとなく女のほうを中心であるというところがあって、日本の場合をいうと、理念としての家族は初めから、日本の家族の実態を表しているのではなくて、

現実とズレていて、つねに崩れていたのではないかと想像しているんです。

橋爪 そこは大変面白いと思ふんですね。儒教の原則からいえば、男性中心ですので、古代の君子にしる聖人にせよ、それから黄帝とかいうものにせよ、全部男性で、女性というのはいま出でてこない。一方、日本の場合には、天照大神というシンボルがある。日本の国家体制やなんかを記述しようとする、女性が入ってきちゃう。ですから、中国的に同化しようとしても、絶対的に無理なんです。そこで漢字というものをいれて、法律と制度、仏教という宗教、こういうものは一応表面上は中国化したわけなんです。ところが、家族というのは徹頭徹尾、男性と女性の合意でやっているものから、中国化できなかった。そこで結婚の形態、いわゆる妻問婚とか、子供の育て方とか、そういうものは表面的な中国文化のなかでも、頑として日本の伝統的な、中国から見れば野蛮なやり方のままだった。

文学について言えば、漢字というものを法律・制度・仏教として運用する場合には完全な漢文ですけれども、それを表音化できるということがわかったので、日本の伝承とかを万葉仮名にして、歌も詠むといふ、婚姻慣習やコミュニケーションみたいなところに文字を使っていくという、新しい方法が生まれた。結局女性たちがいわゆる文学というものを生み出して、男性もそれに応えて、さまざまな詩歌や文学の形態ができたと思えます。そうやって混交していったというのが、わが国の精神文化史、家族史にとって、一番大事だったのではないかと思えます。

ですから長歌にせよ、それから『源氏物語』を頂点とするような文学にせよ、そういう頑ななまでの日本の家族文化・伝統、結婚伝統というものを考えないわけにはいけません。ここに日本の文化的ルーツというものを求めようとするならば、当然仏教でも律令制度でもなくて、国文学の伝統のほうにたぶん行くはずなんです。

岸田 そうですね。今おっしゃった天照大神が女だったというのは、非常に重要なことだと思ふんです。そういう女性中心というか、『源氏物語』における光源氏なんていうのは、言ってみれば、いろいろな女性たちが登場・活躍するための背景みたいなものを見る。そういう女性中心というか、女性が非常に重要な役割を果たしている庶民の文化、具体的なレベルでの男と女の関係というものがずっとつづいていて、その一方では中国から受け入れた男性中心主義的なタテマエというものもあって、やはり支配形態は男性中心になっています。武家とかの層は男性中心文化を受け入れたと思ふんです。しかしそうでない層というのは、あくまで日本的にやってきたのではないかと。

家制度と家族

橋爪 平安時代あたりになると、豪族とかいわれる人たちが親族のグループを作りはじめる。豪族というのは、内部構造を見ると、決して男性中心とはいえない面があって、実際には男性が実権を持っていますけれども、それ以前の太平洋などに広がっているような、双系的というんですか、女性も十分集団を形成する上で、キーになり得るような、そんな集団であるようなんですね。そのあと武士が出てきて、貴族にとってかわって武士集団というのを作る。ところが、武士は貴族と違って、戦闘集団であるために、いつでも男性が大勢集まって行動している。貴族は要するに年貢の上がりやを掠め取ればいいわけだから、相続関係がどんなにばらばらでもいいんでしようけれども、戦闘集団としては、集団の機能を維持する関係で、それまでの慣行をずいぶん変えてしまっていて、男性中心に変質したのではないかと、千年ぐらい

かけて。それが江戸時代の家制度につながってゆく。家制度はわれわれの知っている日本の家族のあるべき姿の一つのイメージになっています。

そこで家制度というものについて考えてみると、これはまず仏教のなかに何の基礎も持っていない。岸田 ええ。そうですね。

橋爪 仏教とは関係ない。ただし、宗門人別とか、家の宗旨という形で、それに裏づけられてくついついていますけれども、お経のなかに、こういう家が正しい、家はこうやって運営しなさいということが書いてあるわけでは全然ない。もう一つ、儒教との関係で見えますと、儒教の原理・原則でできた制度でもないんです。たとえば養子というものがありませんけれども、家制度の場合、儒教では考えられないような養子の取り方をします。ということ、儒教的な粉飾を凝らしているけれども、それとも関係がない。

では家は何なんだろうかということになります。行政指導の産物ですから、行政指導が行き届かない庶民のあいだでは家制度はほとんど定着せずに、夜這いだとか、若衆宿だとか、南洋に起源を持つと思われるような男女ごちゃごちゃの世界が展開されていた。

岸田 武士階級だけですね、家制度が徹底したのは。

橋爪 ええ。そういう行政指導の産物であり、イデオロギーであった。しかし、こうした男性中心の家族形態があつたことが、日本の近代化にプラスに働いたのではないか。明治維新が成功した一つの理由は、日本が家制度をとっていたことにあるのではないかと思うんです。

岸田 なるほど。家制度の延長線上で受け入れることができたということですね、ヨーロッパの制度を。

橋爪 機能として考えれば、家制度下における家族とヨーロッパの家族は、同じじゃないか。そういうふうに理解できたから、家制度、戸籍制度を拡大して、日本中に採用させて、日本中に近代家族を作り出すことができたのではないか。近代家族かどうか知りませんが、とにかく日本中を家にしてしまおう。そんなスケールの大きなアイデアになっているのではないかと思います。

もし家制度がなくて、部族集団のままであったら、アフリカの部族対立みたいなことになって、家族が大切だというモチベーションを、一人一人に与えることがむずかしかつたのではないかなと考えられるんですけれども。

岸田 そうですね。家制度がなかったとすれば、完全にヨーロッパの植民地にされていた危険がありました。文化侵略でもあるわけですから、ヨーロッパの侵略は。文化侵略に対抗するためには、武力だけの問題ではなくて、こちらの文化もそれに対抗するものがないならならぬ。そこで日本の家制度というものが、ヨーロッパの文化侵略に十分対抗できるものを持つていたことが幸運だった、ということだと思っただすけれどもね。

ヨーロッパに対抗しつつ、同時にヨーロッパのものを取り入れて、ますます家制度という形で日本をうまくまとめた。万世一系の天皇がいて、国民は陛下の赤子である、つまり天皇が代々つづいている最高位の親で、国民はその子供であるというような物語を作って、日本全体を一つの家としてまとめることによって、かろうじてヨーロッパに対抗できたというのが、明治以後の日本近代だと僕は思っただすけれどもね、この物語にはいろいろ欠陥もありました。

橋爪 天皇が父親であり、日本全体は家族であるというイメージは、国家としてもある程度効力を持った

し、それから経営家族主義といって、資本主義が発展していくときに、従業員の忠誠を調達するのに、社長さんはお父さん、工場長はお母さん、というのもありましたね。

岸田 国鉄一家とか、昔は言われましたけれどもね。

橋爪 そんなイメージは、たとえば中国だったら絶対に受け入れられなかったと思っただす。中国では家族というのは、いかに拡大しても、同じ姓を持つている人たちということになりますから、皇帝にも必ず姓があつて……。

岸田 血がつながってないためでしょう、中国の場合は。

橋爪 そうです。ですから、皇帝でも、朱元璋とかなんとか、皇帝の姓があつて、その一族はある範囲に限られるんですよ。清朝なんかは満州族ですから、漢民族と家族関係にはないことはあまりに明らかで、そういうイメージはそもそも中国に対しては適用できない。そういうことを言ったとしても、一般民衆は絶対に信じない。

日本の場合、天皇は姓がなく、神話上、日本人の祖先ということになっていきますから、一人一人が家族的に行動するという明治の作戦が成功したならば、国家は家族であると言いますれば、国家規模で人のエネルギーを動員する装置になったのではないかと。

これはヨーロッパの考え方とも違いますね。ヨーロッパの場合は、家族と国家というのは明確に分かれていますから。国家目標を説明して、国家についての忠誠を要求するときには、家族のことは置いておいて、という形になりますね。

岸田 そうですね。ヨーロッパの場合は、国家への忠誠と、家族への忠誠というが、家族主義とをむしろ

対立的にとらえています。たとえばヒトラーの政策なんかによく出ています。思っただすけれども、ヒトラー・ユーゲントという青年団を作るときも、親を捨てて俺のところへ来いという形ですね。親が反ヒトラー的なことを言っていると、子が告発したりしている。聖書（マタイ伝）にも「我が来れるは人をその父より、娘をその母より、嫁をその姑より分たん為なり。人の仇はその家の者なるべし。我よりも父または母を愛する者は我に相応しからず。我よりも息子または娘を愛する者は我に相応しからず」と記されています。ヨーロッパでは、家を捨てることで、より大きな集団に帰属する。日本の場合、父親に対する忠誠をそのまま天皇にずらすわけで、ヨーロッパとは基本的に社会をどうまとめていくかという原理が違ふ。これは理念で社会を形成できないからです。だから、人間が誰でもまず最初にもつ家族的感情に頼らざるを得ないんです。

橋爪 中国の文化大革命の際の毛沢東に対する忠誠を考えてみると、父親を批判させるんです。父親を批判して、毛沢東を本当の父親だと思えと言っているわけですから、やっぱり家族を破壊して国家につながるというヨーロッパ的關係が、日本よりもあると思います。

先ほど、家が行政指導の産物だということに言っただすけれども、このことは、本来の意味での理想型ではないんです。ヨーロッパは行政指導の産物ではなくて、むしろ家とはかくなるものであるという定義そのものになっている。その通りにすれば家族になるし、その通りにしなければ、そもそも家族がでない、という関係になっているのではないかと思います。

キリスト教のファンダメンタリストみたいな人たちが、どんなふうなイメージになるかというと、父母も子供についても、かくあるべきである、ということには聖書に書いてある。その通りにするのが正しい

のであって、それ以外はとんでもないというふうに考えているわけでしょう。だから、理想ではなくて、もう絶対的な行動の方程式なんです。その行動しなければならぬんです。儒教の場合も、たぶんそうだと思います。

日本の場合には行政指導だから、聞いても聞かなくてもいい。一般民衆は家なんてどうでもいいと思っているわけで、そうすると、その発想で外国を見ると、「ああ、核家族というのは、こういう点がすばらしいな、できればそれに近づきたい。でも、そういうのに近づかなくても、もともと私たちは家族を営んでいたんだよ」と、こういうふうになるのではないだろうか。

だから核家族とか、近代家族というものがあっても、それはもの好きというか、たまたまそういうのが好きな人はそういうふうによればいいのであって、ちょっとだけやる人や全然やらない人や、いろんな家族があつていいんだ、ということになる。それなら、家族に対するどんなイメージが日本に入ってきてどんな運動が起こっても、家族の実態は、日本のなかではほとんどばらけて行くだけである、というふうに思います。

岸田 ばらけて行って、どうなるんですかね。

橋爪 つまりどんな社会でも、中国でもどこでもそうですけれども、中国とはかくあるものであるという、家族に対する規範が確立した時期があつて、家族の揺らぎを食い止めるために、それ以後家族というのは、その規範に合わせて作られていったと思うんだけど、日本の歴史をどう遡ってみても、家族に対する規範というのがないみたいだ。それはまだ、文化のままなんです。

岸田 文化のままというとは……。

橋爪 文化のままというのは、もともと何族はこういう習慣でした、別の何族はこういう習慣でしたというだけで、なんでそうなっているかということは、説明が全然ないわけ。だから自然に違つたものになつちやったり、異民族と接触すれば当然違つた形が出てきますが、でももうどうしようもないですね。

岸田 結局、家族という理念は輸入ものというか、もともと外国から来たものですが、日本固有の家族と云うのもあまいで……。

橋爪 だから、そもそも家族はこういうものであると書きとめてあるテキストがあつて、その通りにしないといけないという原理主義や国粋主義があつて、その支持者が家族をそういうふうに行っているというなら、これは一つの運動ですけれども……。

岸田 日本にはそれはないわけですね。

橋爪 全然ないんです、それは。岸田 という、世界の家族のなかで、日本の家族が一番揺れているんですかね。ばらばらで、いろんな形があつて。

橋爪 逆に、どんな形態で家族をやっても、それでも家族だとみんなが信じているという意味では、アメリカの家族よりも安定しているかもしれない。アメリカでは、あるルールを踏み外してしまえば、家族は解体してしまつたわけですね。

近代的自我と家族

岸田 明治の欧米化、近代化のなかで、欧米人に対抗するためには、日本人も彼らのように、堂々と自分

というものを持って自己主張ができる近代的自我を作らなければならぬ、ということが目標になって、その目標のためにいろいろがんばつたわけですね。そのとき近代的自我の確立を妨げる障害と映つたのが家族だったのでないか。とくに日本の家族というのは、母親と息子との結びつきが非常に濃いものから、男の子が近代的自我を確立しようとしたときに、母親との絆が障害になったので、母親を乗り越えていかなければいけないのだということになった。そして、日本国家もヨーロッパ型の近代国家になろうとしたわけで、近代的自我を確立しようとした日本人個人と、近代国家になろうとした日本国家とは同じ現象の二つの面なわけですね。

つまり、近代国家を作るために馳せ参じた人物というのは、近代的自我を確立するためには従来のような母親との絆に囚われていちゃいけないということで、家族との結びつきを切ろうという努力を始めた人物でもあつたんですけれども、その努力は成功しなかつたと思つたんですね。中途半端に終わってしまった。僕なんか、日本近代における神経症の問題とか、対人恐怖症とか、近代日本人が抱え込んだ心理葛藤は、そういうことをやり始めて、無理してがんばつて、挫折したところに原因があるのではないかと見ています。

そのようにして、無理して近代的自我なるものを作ろうとして、そして曲がりなりにも近代的自我を持つた人たちによって、近代国家としての日本が作られたわけですけれども、日本人の近代的自我と同じように、近代国家としての日本国家も腕を伸ばして来た。腕いものであつたがゆえに、戦争でアメリカさんに負けちゃうと、日本国家というのは今の今まで、国のため天皇のためとか言つて、みんなが生命を捨てても守ろうとしていた絶対的なものだったんだけど、あれは何だったかというふうになつちや

て、跡形もない。跡形ぐらひはあるかもしれないけど……。それで、戦後日本人は国家という問題から逃げていくみたいというか、国家というものをあまり考えないで、アメリカさんに国家を預け放しにしているみたいな感じですね。

明治から昭和二十年まで、一生懸命がんばつて作つて、無理して維持していた国家が崩壊してしまうと本来もつとっかりしたものなら、崩壊してもそれなりにまたつづくと思つたんですけど、なんかそこでおつんと切れてしまつて……ということ、日本人が作ろうとした近代的自我が中途半端に終わったということ、一対のことだと思つた。

いわゆる明治以来の日本の知識人が作ろうとした近代的自我というものは、戦後敗戦後国家のほうもばやけてしまつて、そして昔のままの母親と息子の濃い結びつきは減りつつつづいてきていたものだから、そこだけが強く現在まで残つて、現代の日本人の男性にマザコンが増えているとか、大人にならないうか、なれない若者が増えているとかいうことになつたんじゃないか。国家がばやけたというところは、こうなれば一人前の大人であるという規範もばやけたということですから、大人になりたくてもなりやうがないわけですね。そういうわけで、母親が中心になつて、子供たちが固まっているという家族が今の日本に多くなつたんじゃないかな。

ヨーロッパの父親というのは、背後に絶対神を背負っていたけれども、日本の母親の背後には絶対神はいないし、伝統的に母親を制約していた世間というものも弱くなつていくものだから、母親中心になつた場合、母親自身に歯止めというか、自分の子供に対する愛情がどうあるべきか、これ以上のことをしてはいけない、これ以上子供を甘やかしてはいけないとか、そういう歯止め、ブレーキ、そういうものがな

い。可愛がるときも非常に気分的なもので、猫可愛がりに可愛がる。逆に可愛がらないとなると極端に冷たくなるというか、虐待したり放つばらかしたりしてしまう。母親はこうあるべきだというのもない。

そういう意味で、今の日本の家族というのは、混乱しているというか、母親のさばっているのではないですかね。昔だって、日本の家族の中で母親は強かったんですけども、それに対していろんな歯止めがあったのが、その歯止めが崩れちゃって、野放図になってるのが今の状態なんじゃないですか。それにどう対処したらいいかという、ちょっとわからないですけどもね。どうなんでしょう。

橋爪 自我と家の話ですね。

家というのは制度なんですけれど、家産、資産がないと意味がないんです。たとえば武士であれば、資産は何石ということでも形式化されていきましたけれども、武士の職分、家老とかその手の何石取りという職分は、家に対して与えられたものですから、相続できるんですけど、家督を相続すれば、ということでも、一種の資産なわけです。その資産を相続していくために、家という単位が設定されていた。

これは江戸時代のシステムですから、明治政府になったところで、本来はそれが機能を失うはずだったんですけど、ところが、逆に家制度というものを日本中に拡張することにした。たぶんこれは何十年もたないはずだったんですが、そういう選択をしたと。

武士以外にもたとえば農家があって、田畑をずっと相続していくという資産の実態があれば、それは意味があったんでしょう。けれども、サラリーマン階級、教育によって階層を再生産し、父親がどういう地位にいたからといって、子供はまったくその職に就くことを保証されない、最初から振り出しに戻るといふシステムでは、家制度には逆機能的なんです。ですから、解体しなければならぬだけども、少

なくとも昭和二十年まで、このシステムは生き残ってしまった。

なぜかという、それは自我を育てて、自発的な自我からなる国家形成を待つには時間が足りないの、その穴埋めが必要だった。自我が確立していないのに、人々が一生懸命国家のために働くという、そういう個人的な動機を調達するのは何か、それは家族である。家という制度で、家族の個人的な動機を組織してしまえば、彼らは家のために軍人になり、家のために労働者になり、家のために官僚になり、家のために学者になって、一生懸命国家のために尽くすであろうという設計があったんです。そうやって自我の未成熟な日本人を、間接的にコントロールしようと考えたんだと思います。これは一応うまくいったわけですが、自我が近代的な人間、個人というものが育たないという逆作用を及ぼしました。

近代的な主体というのは、日本の場合、家の枠組みのなかで育つ、こういうことだったと思います。ですから、家制度が日本中に明治期に広がったということは、自我の確立にとって、抵抗すべきものなどは必ずしも言えなかった。むしろ多くの階層の人たちにとっては、家制度に巻き込まれるということは、近代的自我に接近する道だったわけなんです。今まで政府とまったく関係ない農村だったんだけれども、家制度によって戸籍ができて、それから徴兵検査もある。そして次男、三男だけれども、甲種合格なんかでお国のために兵隊に行くことになった。こういうふうな家に組み込まれることによって、国家の一員として登録されて、一つの職務が与えられるというのは、そういう近代的な主体になり得るといふ経験だったと思うんですね。

岸田 いや、それは違うのじゃないですかね。いわゆる農民層、庶民層といいますが、そういう層においては、家制度のなかで、家のためということが国家のためとなっていくようなコースが考えられたわけだ

けれども、明治の……。

橋爪 家が、自我に対する束縛である意識されたのは、ごく一部の知識層だけなんです。それはヨーロッパの自我というものがどういうものか、そのオリジナルに触れることができれば、日本のものはインキキだとわかるので、青年として悩む、と、こういう関係になっていくと思うんですね。

岸田 そういう近代的自我の確立を目指した知識層が、家の束縛と近代的自我との葛藤に悩むわけですけども、しかし明治国家も、そういう知識層が官僚になって作ったわけで、近代日本においては、家のためというところで、国家のためという方向に引きずり込まれる庶民層と、明治国家を担った知識層とのあいだに、矛盾というか、裂け目が……。

橋爪 それはありますね。小説の担い手は、そういう家と自我とを対立としてとらえることのできるごく少数者の知識層だった。その読み手や一般大衆は、むしろ立川文庫とか読者層としてはそっちのほうが多かったと思うけれども、そういう人たちはその裂け目などはあまり意識しない、その区別がつかない。家制度の普及によってむしろ近代的自我を育てられたという感覚を持っていた人はいないかと思うんですね。

ところが、日本の近代的自我のある側面は、大衆庶民層では家によって育てられた面があったとすると、その家が昭和二十年に廃止されてしまっただけで、その育てるといふ側面がなくなっちゃった。家族のなかに公共性というものが入ってくるのであれば、国が家という制度を促進していたという側面だったと思うんです。ですから、お国のためという考え方が、親子の間にあり、兵役の義務とか、大日本国防婦人会とかいろいろあったでしょう。それぞれ家族の役割が同時に国家機関の役割であって重なっていたんだけれども、そ

れが全部なくなってしまっただけで、何が残ったかという、近代的自我であったはずが、一つの私的な欲望になった。親から見れば、子供は自分の私物、所有物になった。これがキリスト教であれば、家族にもホーリーという概念があって、それは神につながっているという意味なんです。神につながってれば何でもホーリーなんです。ですけども、日本の家族にはそういう要素がなくなりました。

そうすると、どうなるかという、今おっしゃったみたいな無規範状態というのが全面的に広がっていき、こういうことになるのじゃないですか。

岸田 そういうことになったのが日本の現状ではないかということですね。

家族との葛藤に悩み、家族の絆を断って近代的自我を確立しようとした知識層が近代的国家を作ってきたというところがあって、その知識層と、国家のために家につながるといふふうな指導されたというか、そういうふうな持っていかれた一般大衆というか、庶民層とが二重構造として、近代日本のなかで並存していたと思うんですね。

日本に純文学と大衆文学という変な区別があるというの、そのあたりとつながっているのかもしれないんですけども、そういう知識層の試みは、一般庶民を悪くいえば騙すというか、うまく操るといふか、そういうことで成り立っているの、知識層が作った日本国家もそういう構造の上に成り立っていたわけなんです。日本国家が敗戦によってガタガタと崩れてしまったというの、そこに一因があるのではないかと。知識層だけじゃなくて、庶民層のメンタリティにも支えられていたとすれば、近代日本国家は昭和二十年にああいうふうにはならなかったのじゃないかと思うんですが。

敗戦後の日本に国家というのはいないかという、反国家主義というか、国家嫌悪症というか、

国家というのは悪なんだといった気分が漲りましたね。敗戦前の近代日本国家の悪口を言ってさえいけば
百万歳だったというそのような気分が、いまだにくらつかつづいておられると思えますけれども、そういうこ
とになったのは近代日本国家が、いわば庶民を騙したというか、うまく操った上で、その犠牲の上に無理
して作った国家であったということが、元にあるのじゃないかと思えます。明治政府の連中が追いつ
められて非常に焦っていたという事情はわからないでもないですが……。

橋爪 戦争に負けたからといって、家制度が変わるといえるのは大変奇妙なことで、本来国家と家族は互い
に関係ないのであれば、国家が負けたぐらいで家がどうこうなるわけではない。もしユダヤ人が外国と戦争
をして負けたとすると、大体どうなるかというところ、家制度を強化しようとか、伝統文化を強化しよう、そ
れでも一回戦争に勝とうということになるわけであって、戦争に負けると、普通、伝統的な家制度は強
化されますね。だけど、さきほど言いましたように、国家の行政指導の産物であるこの家制度が、国策
として国民の上に押しつけられたものであったがゆえに、戦争が終わった途端に家がなくなってしまう。
そしてよくも悪くもこの家以外に、自分たちの家族を映し出す一つの理念、規範というものをわれわれは
持っていなかったから、それで完全に家がブライベートで、私のものになってしまったということがあつ
たと思えます。これが他の国にはない、わが国の特別の事情なのではないでしょうか。

社会秩序と家族

橋爪 最近、ブルセラだとか何とか、十年前までなら非難されるべきだったことが公然化してきて、家
族的道徳と対立していたり、というふうにいる言われてはいますけれども、私の考え方からすると、そ

れは先祖返りなのであって……。

岸田 ブルセラが祖先返りですか(笑)。

橋爪 ええ。つまり女子高生にしてみると、家族というのは行政指導の固まりなわけであって、本当は自分
の本心とか欲望とか、生理とか別にあるのに、タテマエで、お父さんはこう言うとか、お母さんはこう言
うとか、学校がこう言うということを押つけられて、その固まりで家ができていくように見えるわけ
です。そうすると行政指導はなければいけませんが、自分の自由が増えるわけですから、父親のほうは自信を
なくしたり、マスコミが煽り立てると、チャンスに付け込んで、若衆宿とか夜這いとか、そういう伝統が
息を吹き返すと思えます。

岸田 その伝統が今のブルセラなんかに現れている。そうすると高校生売春とかいうのも……。

橋爪 新しい現象じゃなくて、日本の家族が本来持っていた可能性なんだと思えます。

岸田 ああ、なるほど。そこまで考えなかつたですけど、そうですね。そういうふうには考えれば、ブ
ルセラ現象とか高校生売春の現象なんか、うまく説明がつかますね。

そうすると、高校生のときに売春をやったからといって、日本の家族は崩壊しないわけだ。たとえば高
校生のとき売春して、あるときやめてちゃんと普通の結婚をするということが可能なのも、日本には家族
が固有のものとして確立されているのではなくて、行政指導だから、厳しくこうであらねばならないとい
うことがないことと関連ある現象なんですかね。

橋爪 江戸時代に身請けという制度があつて、吉原の女郎さんなどが、身請けをされて、家庭の奥さんに
なるということがふつうにありましたけれども、これはヨーロッパではたぶん考えられないですね。

岸田 ああ、そうか。

橋爪 遊女であるというのは、固定した身分ではないんですね。誰でもそうなる可能性があるもので、それ
は一時的な問題であつて、そこでそういう営業をしていけば遊女だけど、身請けされちゃえば、普通の人
になるわけですよ。だから、それは家族と矛盾しないし、家族の正常なメンバーとなることが予定されて
いる。

もちろん売春なんかしないほうがいいとみんな思っているわけですけども、たとえば親が病気になつ
ちゃつて、ほかに売るものがなかつたら、親孝行のためにそういうことをするということが可能なんです。
岸田 孝行娘ということになる。

橋爪 そうなんです。なぜ可能かということ、そういうことをしちやいけないと書いてないから、どこにも
そういうテキストがないんですね。外国であればバイブルに、姦淫すべからずと書いてあるから、もうこ
れはだめですね。それから儒教でももちろんだめです。そんなことをするなら死んだほうがいいんです
けど日本では可能なんです。

岸田 そうか。外国では親孝行のために、家に尽くすために遊女に身を落とすなんてことはないわけだ
な。橋爪 それは最大の親不孝ですからね。それだったら自殺するほうがいいわけだ。

もう一つは、昔の田舎の習慣で、これは地方によるんでしようけれども、十三歳、十四歳ぐらいになる
と、初潮が来たりして、おめでたいというので、娘は盛んにセックスを始めるわけですね。そして十六歳
とかになって、そういうのも一巡したところで、あの若者と仲良くなってきたようだが、それじゃ結婚させ
ようかと。こういうことをしていたわけですから、高校生がそういうことをしちやいけないという考え方

と、全然ちがう原理で運営されていたわけですね。今の高校生みたいに、あんなに發育していたら、当然な
にしてもいいというのが、昔はあつたわけですね。

だけど聖書などを読んでみますと、あそこに描かれている家族道徳の混乱なんていうものは、凄まじい
ものがありまして、要するにメチャメチャなわけですね。そうすると普通はどうなるかということ、このま
まではどうしようもない。こんなに行動規範が混乱しているのでは、少なくとも私とあなたと誰れさん、
そういう選ばれた人たちの間に限っては、きちんとした家族関係を営みましようという運動が起こつてく
るものなんです。

岸田 はあ、ヨーロッパの場合はね。

橋爪 統一教会なんかにしてもそういう要素がないことはないですね。たとえばセックスに対して非常
に潔癖だつたりするわけですね。そうすると、異性にまつたくアプローチできなくなっちゃう。罪悪感を持
たないと異性にアプローチできないわけだから、もうどうしようもない。そうすると、教祖様が誰と結婚
するか決めてくれる、という構造になっているわけであつて、その出発点は、異性を異性として見るこ
とに対する罪悪感だと思えます。そこまでいくと病的ですけど、それは道徳が混乱していることの裏
返しじゃないかと思えます。

岸田 そうすると、ノアの方舟なんかもそういうこととつながつた現象なんですかね。

橋爪 千石イエスのほうですか。

岸田 いや、創世記のノアの方舟です。人類が墮落し、世が乱れ、神が怒つて、大洪水を起こし墮落した
者たちを滅ぼす。そのなかで、義人ノアは神に命じられて方舟を造り、家族と一つがいつの動物たちと

ともに乗り込んで洪水を逃れ、人類の新しい祖となるわけですね。

統一教会も連中の思い込みではそういうことなんですよ。ソドムとゴモラじゃないですけど、みんな乱れているけど、われわれだけは正しく生きていくのだ、というような思い込みで運動しているわけじゃない。はた迷惑ですが……。

橋爪 混乱したときにはまず、全員をなんとかよい方向に導きましょうという常識人が出てくるんですよ。でもたいてい効き目がありません。そうすると次に出てくるのは、分離して一部の人が救われようという、一部の人だけがよくなればほかの人はどうでもいいという考え方ですね。たとえば全部で何人いるけど、半分線を引き、われわれはちゃんとやる。あとの人たちは知りませんという、こういうかたちになると思うんですね。そして、その知りませんという人たちの側に呪いを投げつけて、甚だしい場合には滅ぼしてしまふ。自分たちの社会のメンバーであるということ認めない。こういうふうになるんじゃないだろうか。

昔、家族に対して一つの規範を掲げて社会を再組織したときには、そういうことが必ずあったのじゃないか。だから聖書のなかには、ソドムとゴモラは滅ぼされました、とか、ノアの方舟で残りの人たちは死にましたとか、そういう分離と切断と破壊というふうなストーリーが、何回も何回もあるのだと。

岸田 日本にはそういう発想はないですね。一部の操正しい義人だけが救われるというのは。

橋爪 それは文化だからだと思わんですが、制度になつてないからだと思わんです。そもそも滅びということが可能なためには、滅ぼすパワーが必要ですね。つまり、神というものが必要ですけれども……。

岸田 日本は神がないですから。

橋爪 そうすると、たとえどんなに性関係や道徳なんかが乱れていても、人間対人間の話になつてきたときに、かなりいい加減な男でも、俺はお前を大事にする、ほんとだよなんて女に言うことは可能だし、女もそれを信じてくれます。女性が男性に言っても同じです。実態は違つたとしても、そのなかでなんとかなつていよう。これを信じていければ、実態が乱れているからといって、家族を全部滅ぼしてしまふ必要はないんですね。世の中は乱れているかもしれないけれども、私は何々さんを信じることが出来る、自分の家族はなんとかなつていくと思ひさえすれば、それで当面やつて行ける。

だけど、神というものを間に入れてくると、話が違つてくる。神に愛されることのほうが、旦那さんや奥さん、身近な人間に愛されることよりも大事であるという転倒が起こつていよう、神という考え方のなかには。

岸田 神が出てくるとね。たとえば、悪事をしたとき、それによつて相手の人間がどれほど傷ついたか、どれほど怒っているかということより、それを神がどう思っているか、どれほど自分を罰するかということが気になるといふ転倒ですね。

橋爪 そうすると神の目の前で、そんな家族は滅ぼされても当たり前だという考え方になる。それを救う力は自分にはないと。だから、そこで破壊の物語というのが起こるわけで、これはものすごいパワーですね。そういうフィクションをこしらえた人々がいる。たいていの文明国は、そういうフィクションをいっただけはこしらえるわけです。

岸田 一神教の世界ですね、それは。

橋爪 いや、儒教は一神教ではないけれども、天というものがあつて、道徳・秩序というのは個々の人間に

はどうしようもないという考え方があつてから、俺が見逃すからというわけにはいかないのではないのでしょうか。

岸田 日本にはそういう天の思想もないし、唯一絶対神も存在しないので、家族というのはこの世にある一人一人それぞれの男と女が、それぞれの勝手な幻想で愛し合つて、勝手に結びついてやればいい、ということなんじゃないか。

橋爪 そうだとまでは言いませんが、それとどこが違うかと、外国の人々から見られるのではないかといいことですか。

家族というのが一度、一つの行動規範として聖書なり儒教の古典なり、そういうテキストに書かれてしまつと、家族のあり方が非常に神聖になつて、国家と分離して、国家よりも根本的になるんです。ですから、アメリカの普通の男性の考え方からすると、国家も大事だし家族も大事だ。だけど、かりに国家と家族が矛盾したら、どっちをとるかといえば、家族をとります。だからみんなピストルを持っているわけです。国家は二百年の歴史しかないけれども、家族は聖書が書かれてから、これだけの歴史を持っている。中国にしても王朝がころころ変わりますが、いろんな政策は出るけれど、家族秩序というのはそれだけのものを持っている。

日本の場合、国家と家族が矛盾した場合は、家族をとるといふ考え方がないと思います。

岸田 というよりむしろ、矛盾しないですね。

橋爪 矛盾しないようになっていっているんです。どんなに矛盾しているように見えても、自分で自分の思想をコントロールして、矛盾がないというふうになつていく。「迷惑」といふ考え方があつて、ここで俺が国

家に衝突くと家族に迷惑がかかるか。迷惑という変数を一つ入れると、大抵の矛盾は矛盾でなくなつちやうなんです(笑)。

岸田 戦没学生や特攻隊員の手記などに記されているような戦争中の考え方にしても、家族のためということと国家のためということを、対立的に捉えた例はないと思ひますね。

橋爪 そうなんです。だけど近代であれば、その対立は必ずなくちゃいけない。家と家族というのはそこまで違つたものである。家は行政指導の産物であるから。

だから、文学のなかで家族を描くのは、家族を描く基準をどこにとるかという点で、大変に困難になると思う。現象として家族のなかにどんなことが起こつたかということを描くことは可能です。心理の動きとか、こういう不倫があつたとか。でも、だからどうなんだということを描く基準がないから。

日本文学における家族

岸田 明治以来、家族を描いた日本の小説というのは、家族間の葛藤というか、家族がどう対立し、どのように和解するかとか、母親の束縛からいかに脱出するかとか、家族との絆をどう克服して、近代的自我を確立するかとか、そこで母親とか父親とか、ほかの家族がどう絡み合っているかとか、そのようなことばかり描いているような気がするんですけれどもね。

家族というものはいかにあるべきかというふうなことは、あんまり日本の家族を扱った近代小説には登場しないのじゃないですか。

橋爪 私は専門外なので、たまたま知っているものしか言いませんが、たとえば『舞姫』というのがある。

これは主人公が二つの国家の間を移動しているわけですね。向こうのなんとかいう女性は、ヨーロッパにおける家族概念や恋愛概念とかを背負って、海外に接している。当然その枠組みのなかで解釈できるようなことをやって、恋愛関係になったわけですね。

ところが彼は帰ってきちゃう。そして日本に婚約者なんかいるのかな。要するに親族とか大勢出てきたりして、日本の家制度にからめとられてしまう。そこへ彼女が追いかけてくるわけでしょう。ここで二者択一の非常に大きな精神的ドラマが始まるはずなんだけれども、ちっとも始まってないんですね。だからたいへんがっかりする小説なんですけれども(笑)、それが日本の最大の文学者の作品であるということになれば、それから推して、大体他はだめなんじゃないかなと思ってるんですけれども(笑)。

あと『雪国』とか『伊豆の踊子』といった作品における、男女関係のなから神なり超越的な原理を媒介にして、二人を超えた家族という集団を作り出しているというエネルギーのなさ。

岸田 そうですね。漱石の作品も、『それから』、『行人』、『道草』など、どれをとってみても、家族はいろいろ出てきますが、そういう発想はないですね。

橋爪 全然ない。だから男女というものはいくらでも描けるけれど、それを承認している、客観的に見ている視線というものを作者が持っていない。これは文学によらず何でもそうかもしれないけれども、神の視線というのはいくら上にあるから、自分の感覚とか、相手の感情とか、そういうものと無関係なんです。そういうところから記述するというスタイルをとるわけですね。

岸田 それは神がいまからね。そういうスタイルは日本人はとれないのです、そもそも。だから、個人としての男と女が、くっついたり離れたり、友達を裏切ったり、友達の女を奪ったり、そういうことに

おける個人の心的葛藤といいますが、そういうのを描くしかない。そういう意味で、家族そのものをテーマに取り上げた作品というのは、あまりないのじゃないですか、日本文学のなかには。

橋爪 家族は、自分が作り出した一つの集団である。自分の作り出せる集団って滅多にないけれども、家族はそうでしょう。それを守るといって自覚がないから、国家と明確な角度がとれない。家族を守るといって角度があれば、国家を批判することができましょね。日頃言っているけれども、少なくとも税金が高いのはなぜとか、子供にろくな教育ができないのはなぜとか、こんな交通事故が多くて、娘におちおち表を歩かせられないのじゃないかとかいって、しょっちゅう批判的意識が出てきますよ。けれど、国家のおかげでわれわれも生きています。そういう感覚になっていくので、それは思わないですね。

岸田 国家が大きな親だから、その親のおかげで生きていくということになっちゃうんだな。親は昔は天皇だったけれども、天皇が親の位置から退いても、やっぱり日本国民にとっての国家というのは親のようなものなんです。この親は子供のことはあまり考えない、薄情で勝手な人でもない親なんです。日本国民はそこは気がつかず、そのためやはり国家と自分の家族を対立させるといって発想が、そもそもないんだなあ。そして、その国家がひどいことをやっても、自分たちの手で国家をつくり直すとは思わないですね、がまんするだけで。

橋爪 社会がそうできているのに、文学だけそこから飛び上がれと言っているのは無理なんですけれど、しかし文学者には、そういう社会の実態について、自分独自の視点を提供して、こういう例外的な感受性とか、例外的な理性とかいうものがあるんだということを、言葉を通じて訴えかける権利があると思っただけ

れどもね。そういう作品が多ければ、私ももっと小説をたくさん読むんですけど(笑)。

ただ文学の任務は、別にその規範を作り出して明らな展望を切り開くことには必ずしも思わないわけ。だから文学に望みたいことは、人間の現実をつぶさに、かつ正確に記述する。それが人に感動を与えればなおけ、こうなんですけれども、そういう正確に記述するとか、ありのままに、あるがままを見つめるといって、そういう勇気を文字というものを通じて発揮する、ということにあると思っただけ。

そうすると、家族を選ばず、現象で家族を書くことももちろんできますけれども、たとえば規範がないというふうには書くということ、より現実に近づくことだと私は思っただけ。たとえば規範がない発想がないのではないか。あるがままの家族を日本を描こうとすると、ある分析軸が要るんですね。たとえば家族のほかにあり方と比較するとか、江戸時代の家族や明治時代の家制度と比較するとか、何かない、ただ現実に密着するだけでは、それが何なのかという意味をそこに盛り込むことができない。だから何か補助線なり工夫が欲しいわけですよ。現実をありのままに率直に書くためにさえもそれが必要だと思っただけなんですけれども、そういうことがないのではないかと。

たとえば家族の現状が無規範である、と書くのは私は正しいと思っただけ。それを小説が書くのは実は大変むずかしいことだと思っただけ。そういうことを少し望みたい。無規範な現実が、無規範のままに克明に描かれて、現実もそうであり、文学もそうであるという形で、二重に私たちに突きつけられれば、それに対してどういう方法をとればいいのかという次のアクションがわれわれに起こってくると思います。ただ、経験する通りの現実がべったり小説に書いてあるだけでは、いかなる次のアクションにも結びつかないと思います。

おまけ 『つりぐも』 橋爪 大三郎 大学教育研究センター通信 1998.11 p.23

橋爪 大三郎

1. 1948年10月21日
2. 東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授
3. 社会学
- 4.



昨年秋から、社会経済生産性本部・社会政策特別委員会で、専門委員として活動し、7月に中間報告「選択・責任・連帯の教育改革」を公表しました。大学に関しては、学生定員の廃止、入試の廃止とキックアウト制の導入、奨学金の大幅拡充などを提言しています。NHKの視点論点、毎日新聞、朝日新聞、日本経済新聞の文化欄でも、この趣旨を紹介しました。中間報告の全文は、私のホームページ <http://www.valdes.titech.ac.jp/~hashizm> で読むことができます。